

「解答透視眼鏡」

登場人物

佐藤優菜（18） 高校3年生

冴木紗季（18） 高校3年生

浪川英司（18） 高校3年生

佐藤優子（50） 優菜の母親

飯島貴志（42） 優菜の担任 数学教師

佐藤誠也（55） 優菜の父親

大神秀樹（18） 高校3年生

東野 東慶大学職員

女性職員

女性教師

○桜川高校・教室・内（夕）

佐藤優菜（18）、全国模試の成績表を見て頭を抱えている。

志望大学は全てD判定。

冴木紗季（18）、担任教師の飯島貴志

（42）から成績表を受け取る。

紗季「また怒られるね、優菜のママ怖いから」

優菜「どうせ紗季は良いんでしょう」

紗季の成績表にはB判定が並ぶ。

飯島「佐藤！冴木！聞ってるのか」

優菜と紗季、姿勢を正す。

飯島「お前らも学年トップの浪川や大神を見習え！期末試験は明日、共通テストは来月なんだぞ」

浪川英司（18）、優菜に冷たい視線を向ける。

その横で大量の眼鏡を机に並べている大神秀樹（18）。

○道（夕）

雨が降っている。

優菜、紗季に手を振って別れる。

○アパート・表（夕）

外壁が変色した木造アパート。

佐藤優子（50）、隣人と話している。

隣人「長男は確か東京の大学生だそうで」

優子「優馬は医学部なんです、国立の」

隣人「それは優秀なお子さんで」

優子「ギリギリ合格ですよ」

嫌らしく笑う優子。

隣人、引き攣った笑みを浮かべる。

優菜、帰宅する。

優菜「ただいま」

優菜を無視して隣人と話し続ける優子。

優菜、俯く。

○同・佐藤家・玄関・内（夕）

優菜、靴を脱いでいる。

無表情の優子が入ってくる。

優子「どうだったの？」

渋々優子に成績表を渡す優菜。

優子、成績表を凝視する。

優菜「判定は良くなかったけど、英語は、」

優子、優菜の言葉を遮るように成績表をビリビリに破る。

優菜「……ッ！」

破った成績表を優菜に投げつけ、リビングへ消える優子。

○同・同・優菜の部屋・内（夕）

優菜、入ってくるや否や、鞆を床に叩きつけようとする。

優菜「……勉強しよ」

机に向かい、数学の参考書を開く。

突如、部屋が光に包まれる。

雷鳴が轟く。

優菜「キャッ……！」

窓の外を確認する。

優菜「なんなのよ……」

優菜、勉強を再開しようと参考書に目を落とすと、禍々しい緑色のオーラを放つ眼鏡があることに気付く。

優菜「……なにこれ」

恐る恐るその眼鏡を手に取り、マジマジと見る優菜。

ゆっくりとかける。

眼鏡越しの景色は、少し薄暗い。

優菜「……サングラス？」

優菜、ふと参考書を見る。

優菜「！？」

眼鏡越しに参考書を見ると、参考書の上に数字が浮かび上がっている。

優菜「……な、なに……？」

ページを捲る。

そこにも数字が浮かんでいる。

次々に捲るも、全てに数字が見える。

眼鏡をかけたり外したりする優菜。

かけると数字が見える。

優菜「この数字……まさか、答えが……？」

しばらく呆然とするも、徐々に笑いがこみあげる。

優菜、高笑いする。

○桜川高校・教室・内

黒板には『期末試験1日目 化学基

礎・世界史・現代文』とある。

胸ポケットを気にする優菜。

紗季、はしやぐ生徒を睨み、

紗季「喋りたいなら外行けよ」

優菜、不敵に微笑んでいる。

紗季「聞いてる？」

優菜「え？ああ……」

紗季「テスト自信ある？」

優菜「……ない、けど」

紗季「けど？」

優菜「学年1位かもしれない……」

紗季「はあ？」

飯島、入室。

飯島「席に着け、試験始めるぞ。トイレ行き

「たい奴は今行け。途中退室は一切認めん」

優菜、胸ポケットから眼鏡を取り出す。

○同・外観（夕）

○同・教室・内（夕）

競馬新聞を読む飯島。

全員テストに集中している。

優菜、深呼吸して眼鏡をかける。

眼鏡越しに全問題の解答が浮かび上がる。

優菜の口角がニヤリと上がる。

○同・4階廊下

陽光が廊下を照らす。

○同・教室・内

黒板には『期末試験4日目（最終日）

数学1 A・2 B』とある。

全員集中している。

眼鏡をかけている優菜、スラスラとペ
ンが進んでいる。

○同・職員室・内

数学の問題用紙を見る飯島と女性教師。

女性教師「今回の数学難しいですね」

飯島「浪川や大神に毎回満点取られちゃ癪で
すからね」

女性教師「テストを私物化しないで下さい」

高笑いする飯島。

○同・教室・内

教師が見回っている。

優菜、解答を見直している。

優菜M「流石に全教科満点は怪しまれるか」

優菜、大門4（2）の解答を消す。

先生「そこまで」

全員一斉にペンを置く。

優菜M「1問ミスならママも許してくれるか」

眼鏡を鞆にしまう優菜。

○道（夕）

優菜と紗季、歩いている。

紗季「やっと試験終わった。どうだった？」

優菜「1週間後のお楽しみってことで」

紗季「マジで1位取れるって思ってたの？」

嘲笑する紗季。

○桜川高校・教室・内

T「1週間後」

ソワソワしている優菜と紗季。

浪川は外を眺め、大神は数種類の眼鏡を
かけ比べている。

飯島、教卓を叩く。

飯島「数学のテスト返すぞ。今回の平均点は
過去最低だった。しっかりしろよ！」

口々に文句を垂れる生徒たち。

飯島「じゃあいつもどおりトップ3を発表す
る。まず3位は……85点、冴木」

紗季「マジで！？やった！」

紗季、飯島から解答用紙を受け取る。

優菜「おめでとう」

笑顔で席に戻る紗季。

飯島「次、第2位は……90点、大神」

大神「2位かい！」

大神、解答用紙を受け取る。

優菜「……あれ？これだと1位が1人しかないけど……」

飯島「そして栄えある1位は……95点、浪川！」

優菜「……え？」

浪川、飄々と解答用紙を受け取る。

飯島「そしてまさかのお前もだ！」

飯島、優菜を指さす。

生徒たち、騒然。

紗季「ウソでしょ!？」

浪川「先生、1位が2人なら2位はいませんし、大神は3位、冴木は4位ですよ」

飯島「あ、そうか」

優菜「勘弁してよ……」

優菜、安堵の溜息をつく。

飯島「ところで佐藤」

優菜「はい」

飯島「お前、カンニングしたな？」

優菜「……ッ！？」

騒然とする教室内。

優菜「し、してませんよ！」

飯島「ホントか？」

優菜「1位の私が誰の解答見るんですか！」

飯島「何か信じらんねえな。平均40だぜ？」

浪川、目が泳ぐ優菜を見る。

○同・外観（夕）

チャイムが鳴る。

生徒の声「これでホームルームを終わります」

○同・教室・内（夕）

生徒たち、次々と帰宅する。

帰宅準備をする優菜と紗季。

紗季「数学以外満点……どうなってんの？」

優菜「現役生は最後まで伸びるの」

紗季「限度があるでしょうが」

怪訝な表情をする紗季。

浪川が来る。

優菜「浪川君？」

浪川、優菜の机にある眼鏡を見る。

浪川「今日返された数学の解答用紙、良かったら見せてくれないか」

優菜「……何で？」

浪川「同じ1番の佐藤はどこで間違えたのか
なと思って」

優菜「……まあ、別にいいけど」

優菜、解答用紙を浪川に渡す。

紗季「とか言っちゃって、ホントは優菜と話
したいだけなんじゃないの？」

優菜「え？」

浪川「何か言ったか？4位」

紗季「うっさい！むつつりスケベが」

浪川「（優菜に）東大受けるのか？」

優菜「……東大？」

浪川「文1なら同じだな」

浪川、解答用紙を優菜に返し、去る。

紗季「アイツ優菜のこと好きなのかな」

優菜「浪川君は恋愛とかいうタイプじゃないよ……」

浪川を睨みながら紗季と出て行く優菜。

浪川「佐藤って眼鏡かけてたか？」

大神「いや、見たことねえな」

眼鏡を片付ける大神。

浪川、優菜の席を見つめる。

紗季「マジで教えてよ、どうやったの！」

目が回る優菜。

優菜「酔う……」

紗季「教えて！今すぐ！」

優菜「分かった！教えるから」

紗季「ホント！？」

優菜、吐き気で口を抑える。

ヤングシナリオ大賞 応募用紙

12

優菜、紗季を振り払う。

○公園（夕）

眼鏡をかけた紗季、優菜の前でベンチに座って参考書を見ている。

紗季「……ヤバくね、これ」

優菜、紗季から眼鏡を取り返す。

優菜「誰にも言わないでね」

呆然とする紗季。

○アパート・佐藤家・玄関・内（夜）

優菜、笑顔で帰ってくる。

優菜「ママ！」

早く靴を脱ごうと横着する優菜。

優子、気怠そうにリビングから来る。

優子「なに？」

優菜「これ見て！」

優菜、期末試験の全解答用紙を自慢げに優子へ渡す。

数学以外全て満点。

優菜「凄いでしょ！？」

優子「数学だけ惜しいわね」

優菜「ああ……まあ……」

優子「よくやったわ！」

優子、優菜を抱きしめる。

優菜「……ッ！」

優子「さすが私の娘！期待してたとおりでわ」

満面の笑みを浮かべる優菜。

優子「そうだ。今度ご褒美にパパに会おうか」

優菜「え！ホント！？」

優子「離婚してからずっと会いたがってたで

しょ？」

優菜「約束だよ！やった！」

はしゃぐ優菜。

優子、不敵に微笑む。

○同・同・優菜の部屋・内（夜）

優菜、家族写真を眺めている。

両親と幼い優馬と優菜が映っている。

優菜「そうだ」

優菜、解答用紙を机に並べる。

それらを撮り、SNSに投稿する。

○桜川高校・教室・内

優菜、紗季に昨日のSNSの投稿を見せている。1万いいね。

優菜「朝起きたらこんなことに！」

紗季「凄いいね。けどあんまりこの時期にそういうの載せない方が良くない？みんな敏感になってるし」

優菜「そうかな？」

紗季「ま、どっちでもいいけど」

飯島、入ってくる。

飯島「佐藤、期末の数学の解答用紙持って、ちよつと来い」

優菜「……？」

浪川、飯島と出て行く優菜を見つめる。

○同・職員室・内

飯島、優菜が持ってきた数学の解答用

紙の大門4(3)を指す。

飯島「お前、なんでここ解けた。ここは(2)が正解してないと解けないんだよ」

解答用紙の大門4(2)は白紙。

優菜「え？…あ、それは…」

飯島「俺にチクった奴がいてな。やっぱりお前…」

優菜「だ、だからしてませんって！」

飯島「じゃあ解けた理由を5秒以内に答えろ、さもないと0点にするぞ」

優菜「え！？」

飯島「5, 4…」

優菜の目が泳ぐ。

飯島「3, 2…」

優菜、机の上の消しゴムに気付く。

飯島「1、ゼ…」

優菜「(遮って)時間切れだったんです！」

飯島「そうだ、時間切れだ。0点な」

優菜「じゃなくて！時間切れギリギリで(2)

を消したんですよ」

飯島「……なぜ？」

優菜「全部解き終わって見直しをした時に、
（２）が間違えていると思ったんです。だから、（２）と（３）を解き直そうとして
（２）から消していたらチャイムが鳴って
……でも、（３）が合っていたということ
は（２）も合ってたんですね」

飯島「……」

優菜「ほら！ 実際（２）に消しゴムで消した
跡があります」

飯島、消した跡を確認する。

飯島「……しゃあねえ。今回はそれで納得してやるか」

優菜、小さく安堵する。

○同・同・表

優菜、職員室を出た途端、大きく安堵の溜息をつく。

優菜「危なあ……ていうか、告げ口……？ 解

答用紙を見せたのは、紗季と友美と絵里香

と、後は……」

優菜、前から来る浪川と目が合う。

優菜「……」

浪川「何かやったのか？」

優菜「別に……浪川君こそ職員室に？」

浪川「ちよつとね」

浪川、職員室に入っていく。

浪川を睨む優菜。

○同・同・内

飯島、浪川に怒鳴る。

飯島「違ったじゃねえか！」

浪川「そんなハズは……」

飯島「今度恥かせたらブチのめすぞ！」

浪川、舌打ち。

○同・教室・内

ひそひそと話す優菜と紗季。

紗季「浪川だね」

優菜「でも、私のカンニングを告げ口して浪川君に何の得が……」

紗季「そりゃライバルを減らすためでしょ」

優菜「ライバル？」

紗季「浪川からしたら優菜は同じ東大志望のライバルなのよ。優菜が不正で高得点を取っていると確信したからこそ、受験当日までに何としてでもその不正を暴いて敵を減らしたいんじゃないの？」

紗季「勉強するより敵を減らす方が合格率が上がるってこと？」

紗季「あのレベルだとそうなんじゃない？」

優菜「（鼻で笑って）いいね……そっちがその気なら受けて立つよ……浪川」

優菜、不敵に微笑む。

○タイトル「解答透視眼鏡」

○桜川高校・教室・内

体操服に着替える女子生徒たち。

優菜、眼鏡をポーチに入れ、そのファスナーに4桁のダイヤル式南京錠を付ける。

紗季「何してんの？」

優菜「体育の時は目を離すからね。ダイヤル何番にしようかな」

紗季「眼鏡より制服盗まれるんじゃない？」

優菜、黒板の今日の日付『12月10日』を見る。

ダイヤルをセットし、ポーチが開かないことを確認して鞆にしまう。

○同・運動場

男子と女子が離れて整列している。

男女とも点呼中。

女子の方にいる優菜と紗季。

優菜、ふと男子の方を見る。

男子担当教師「おい！浪川どこ行った」

男子1「さあ」

優菜「……？」

男子2「そーいや腹痛いとかでトイレ行くつて言っていましたよ」

優菜「！」

優菜、男子の集団を見渡し、浪川がいないことに気付く。

○同・4階廊下

浪川、窓から運動場に優菜がいることを確認し、教室へ入る。

○同・教室・内

浪川、優菜の席へ行き、引き出しを確認する。

浪川「……」

優菜の鞆を漁る。

南京錠付ポーチを見つける。

浪川「南京錠……それほど大事か」

浪川、南京錠のダイヤルを回す。

○同・運動場

ソワソワする優菜、挙手する。

優菜「先生！お腹が痛いのでお手洗いに」

と、返事を待たずに列から抜ける。

先生「ちよつと！」

紗季「優菜……？」

優菜、校舎内へ疾走。

○同・教室・内

浪川、南京錠に手こずっている。

○同・廊下／階段

優菜、廊下を全速力で走り、階段を一段飛ばしで上る。

優菜「やっぱり気付いてた……！」

優菜、踊り場で曲がると、降りて来た飯島とぶつかる。

優菜「キャッ！」

転倒する優菜。

飯島、大量の資料を周囲にぶちまける。

飯島「何してんだ！」

優菜「す、すみません！」

優菜、無視して行こうとする。

飯島「テメェも拾えや！」

優菜「え……あ……」

優菜、一瞬迷うが、資料を拾い始める。

○同・教室・内

浪川、南京錠の4桁のダイヤルが分からず、優菜の鞆から生徒手帳を取り出す。

手帳には『生年月日…2006年10月26日』とある。

ダイヤルを『2006』にセット。

開錠されない。

浪川「クソ！」

『1026』にセットし始める。

○同・階段

優菜、飯島の資料を拾い終わる。

優菜「じゃあこれで」

走り出そうとする優菜。

飯島「だから走んなったってんだろ！」

優菜「うッ……」

飯島「ちよつとこっち向け！」

優菜、拳を強く握りしめる。

飯島「大体お前はさ……」

飯島の説教が始まる。

優菜、足を小刻みに揺らし始める。

○同・教室・内

浪川、『1026』でも開錠できない。
周囲を見渡す。

黒板の『12月10日』が目にとまる。

浪川「……」

浪川、ダイヤルを回す。

○同・階段

飯島、優菜に説教している。

飯島「てことだ！分かったか！」

優菜「はい！分かりまりました！」

上の階へ疾走する優菜。

飯島「おい！走ってんじゃねえよ！」

飯島、怒りで資料を真っ二つに破る。

○同・教室・内

浪川、走ってくる足音が廊下から聞こえる。

浪川「…ッ！」

× × ×

優菜、ドアをバンッと開け入る。

誰も見当たらない。

自分の鞆の中身をひっくり返す優菜。

優菜「ない！」

教卓の下に、優菜のポーチを持つ浪川が隠れている。

紗季が入ってくる。

紗季「優菜！いきなりどうしたの！？」

優菜「クソッ…！」

紗季「…：優菜？」

優菜、肩で呼吸している。

○同・女子トイレ・内

優菜、紗季の隣で顔を洗っている。

紗季「浪川が盗ったのよ」

優菜「大丈夫。南京錠のダイヤルは何の意味もない番号だからまず開けられない」

紗季「そうじゃなくて」

優菜「……？」

紗季「次の時間、数学の小テストじゃなかったつけ……」

優菜「あ……」

紗季「期末で1位だったのに、小テストの点数が低いなんてあの時不正してたって言うのと同じじゃん！」

優菜「いや、それよりママが……クソッ！」

優菜、思い切り扉を蹴り飛ばす。

紗季「ッ！」

優菜「何とかしないと……！」

鏡に映る自分を睨む優菜。

○同・教室・内

全員が小テストに備えて勉強する中、
ひとり頭を抱える優菜。

紗季、優菜を心配そうに見る。

優菜M「飯島が来る前に何とかしないと……
浪川に眼鏡を返せと迫る？ いや、浪川が盗
った証拠がないしシラを切られるだけ。ト
イレでやり過ぎるか？ たかが15分……い
や、飯島はテスト中の退出を絶対認めない。
しかもそれだと『やはり眼鏡がないとダメ
なんだ』と浪川に確証させるだけ……クソ
ッ！」

優菜、ふと廊下にある掃除用具ロッカ
ーを見る。

優菜「……」

飯島、入室。

飯島「席に着け、試験始めるぞ。トイレ行き
たい奴は今行け！ 途中退室は一切認めん」
挙手する優菜。

紗季と浪川、優菜を見る。

優菜「行っているですか」

飯島「さっさと戻って来いよ」

出て行く優菜。

大神、眼鏡を拭いている。

○同・4階廊下ゝ階段

優菜、廊下を疾走し、階段を駆け下りる。

○同・1階廊下

優菜、放送室の前まで来る。

周囲に誰もいないことを確認すると、壁にある火災報知機のボタンを押す。

○同・教室・内

火災報知音が鳴り響く。

騒然とする生徒たち。

紗季「な、なに！？」

スピーカーから録音された女の声が流れる。

女の声「只今2階の食堂から火災が発生しま

した。生徒は、教師の指示に従って運動場に避難してください」

騒然とする生徒たち。

飯島「落ち着け！全員廊下に並べ」

紗季「優菜は！？」

飯島「いいから並べ！」

全員、廊下へ出る。

○同・4階廊下

3年生全員が並んでいる。

紗季、走ってくる。

紗季「トイレにいません！」

飯島「佐藤は俺が探す！まずはお前らだ」

紗季、戸惑いつつも、全員と移動する。

しばらくすると人がいなくなる。

掃除用品ロッカーが開き、優菜が出て

くる。

優菜「よし」

優菜、教室へ。

○同・教室・内

優菜、浪川の鞆からポーチを取り出す。

優菜「浪川……！」

ポーチをポケットに押し込む。

○同・運動場

校長、整列中の全校生徒に話している。

優菜が走ってくる。

飯島、優菜に気付き、

飯島「おい！どこにいた」

優菜「お腹が痛くて保健室に……」

飯島「勝手なことしやがって！さっさと並べ」

優菜、列に入る。

紗季「優菜！」

優菜「心配かけてごめん」

校長「火事は発生しておりませんでした。恐らく誤報と思われます。また、放送に関しては先月実施した火災訓練の時のCDがカセットに入っていたままでした。申し訳ございません」

校長、頭を下げる。

不敵な笑みを浮かべる優菜。

○同・昇降口（夕）

生徒たちが帰宅している。

優菜と紗季、靴を履き替えている。

紗季「良かったね、数学の小テスト中止にな
って」

優菜「私って運良いかも」

紗季「良すぎだけどね」

優菜「……」

紗季「優菜が鳴らしたでしょ」

優菜「……」

紗季、優菜の顔を見て笑う。

紗季「冗談だって！何マジ顔してんのよ」

優菜「いや、してないし」

紗季「ていうか話変わるけど、優菜って大神
と付き合ってたの？」

優菜「変わり過ぎでしょ」

紗季「そういう噂が流れてるんだけど」

優菜「なにそれ？普通にデマなんだけど。て
いうか大神君ってずっと眼鏡イジってて怖
いんだよね」

紗季「言えてる。きっと眼鏡フェチなのよ」
優菜と紗季、笑う。

○道（夕）

優菜と紗季、歩いている。

紗季「そういえば今日パパと会ったっけ」

優菜「（満面の笑み）うん！」

紗季「楽しんで来てね」

優菜「もちろん！」

優菜と紗季、手を振って別れる。

○高級レストラン・内（夜）

3人席に座る優子、腕時計を見る。

優菜、ハンカチで手を拭きながらトイ
レから戻ってくる。

優菜「まだ？」

優菜、扉を見る。

佐藤誠也(55)が入ってくる。

優菜「パパ！」

優菜、誠也に手を振る。

誠也、笑顔で優菜に手を振り返す。

誠也を睨む優子。

×

×

×

テーブルには食事や飲み物、プリザーブドフラワーなどが綺麗に並んでいる。

優菜、優子、誠也、行儀良く食事中。

優菜「(誠也に)元気？」

誠也「ああ。優菜も元気そうで良かった。少し

見ない間に大きくなったな」

優菜「もう18だもん」

誠也「大人っぽくなったな」

優菜「そうかな？」

髪を触る優菜の頬が紅潮する。

優子、わざとらしくフォークをガチン

ツと皿にぶつける。

ビクツとする優菜と誠也。

優子「あら、ごめんなさい」

優菜「……」

誠也「（優菜に）最近楽しかったこととか、色々話してくれよ」

優菜「あ、うん！昨日ね、紗季と、」

優子「（遮って）この子、この間の期末試験で学年1位になったのよ」

優菜「あ……」

誠也「本当か？」

優子「ええ。桜川高校でも1位となれば東大でもどこでも行けるわ」

誠也「お前に聞いてないよ。優菜、そうなのか？」

優菜「う、うん、ほとんど満点だったの。数学だけ満点取り損ねちゃったけど」

誠也「よく頑張ったな。優菜が一生懸命勉強したと思うだけで、それだけで嬉しいよ。」

結果は二の次さ」

優菜「パパ……」

優子、鼻で笑う。

誠也「……あ？」

優子「相変わらず甘いよね」

誠也「なんだと？」

優子「あなたと別れてから2人の成績は格段に上がったわ。優馬が医学部に行けたのも優菜が伸びたのも全部私が勉強を見るようになったおかげよ。今やご近所さんもママ友も全員私に教えを乞うわ」

誠也「子供はお前のブランドバッグじゃねえぞ。それにその結果は全部2人の努力の賜物だ」

優子「負け惜しみね」

優子、下品な笑い声をあげる。

誠也「テメエ……！」

ナプキンをテーブルに放る優子。

優子「帰るわよ」

優菜「え！もう！？」

優子「用は済んだわ」

優菜「え……」

優子、荷物を持って出て行く。

優菜、すぐるように誠也を見る。

誠也「……悪いな、2年ぶりだったのに」

優菜の目に涙が浮かぶ。

優菜「……またね」

と、優子の後を追う。

○同・表

優菜、優子に追いつく。

優子「東大よ」

優菜「……え？」

優子「あなたは東大に行きなさい！そしてあの男に後悔させてやるのよ！いいわね！？」

優子、優菜を睨み付ける。

固唾を飲む優菜。

○桜川高校・教室・内

浪川、眠っている。

自習中の紗季の下に、優菜が来る。

優菜「ちよっと頼みがあるんだけど」

紗季「ん？」

優菜「来週、共通テストでしょ？そこでまた

浪川に邪魔されたらシャレになんないから
さ、その前にこっちから攻めようと思うん
だけど、協力してくれないかな」

紗季「……まさか入試でもあの眼鏡使うの？」

優菜「なんで使わないの？」

紗季「……」

優菜「そこでちょっと手伝ってほしいの」

紗季「忙しいんだけど」

優菜「そこを何とか、1日だけ！」

紗季「……」

優菜「……じゃないとママとパパが……」

紗季「……パフェ2つなら」

優菜「ホント！？ありがとう！」

紗季「で、何するの？」

優菜「浪川とデートするの」

紗季「は？」

優菜、浪川を見る。

○カフェ・内

浪川、席で前髪を整えている。

遠くの席でパフェを2つ食べる紗季。

優菜、入ってくる。

浪川「1分遅刻だ」

優菜「あなた、モテないでしょ」

浪川「勉強を教えて欲しいって？」

優菜「共通テストまで後少しだから」

浪川「聞くことあるか？最近凄い勢いで伸びているじゃないか。魔法のように」

優菜「……実力です」

浪川「そうか。なら俺も色々聞こうかな」

優菜「オッケー」

浪川「良かったら先に俺からでもいいかな」

優菜「別にいいよ」

浪川「数学で分からないところがあつて」

浪川、数学の参考書を開く。

浪川「（問題を指して）ここなんだが」

優菜、参考書の表紙を見る。

優菜「『プラチナ数学』？」

浪川「超難問でさ。一回解いてみてくれよ」

優菜「問40番？」

浪川「ああ」

優菜、眼鏡を取り出し、かける。

その様子を凝視する浪川。

優菜「何か食べてていいよ？」

浪川「……」

優菜、ノートに問題を解き始める。

× × ×

伸びをする優菜。

優菜「終わったー！」

浪川、優菜の答え合わせを始める。

優菜「お疲れ様とかないわけ」

浪川「早かったな」

優菜の解答と正解を見比べる浪川。

浪川「……合ってる」

優菜「やったね」

浪川「全国模試2位の俺でも30分はかかつ

たのに、たったの10分か」

優菜「……分からないんじゃないかなかったの？」

浪川「ちよっとトイレ」

席を立つ浪川。

優菜、眼鏡を机に置き、深呼吸。

紗季、スマホを見ている。

浪川、トイレの前に着くと、そのまま
席へ戻り始める。

遠回りにして優菜の背後へ回る。

浪川「（優菜に）そういえば眼鏡いつからか
け始めたんだ？」

優菜「（振り返って）！？」

浪川、優菜の隙をついて、眼鏡を取る。

優菜「あ……！」

浪川「お洒落だな」

浪川、眼鏡をかける。

硬直する優菜。

浪川M「さあ！これの正体を……！」

浪川、参考書を見る。

浪川「……ッ！？」

眼鏡越しに解答が浮き上がっていない。
視界も良好だ。

浪川「……そんな……」

優菜の顔が一瞬ニヤける。

優菜「（怒った顔で）ちよっと！返してよ」

優菜、呆然とする浪川から眼鏡を奪う。

優菜「何なのよ、もう」

優菜、眼鏡を持って立つ。

○同・女子トイレ・内

優菜、入って鍵を閉める。

優菜「ハハ……ハハハ……アハハハハ！」

眼鏡を握りしめる。

優菜「残念……これはただの伊達眼鏡。問題を解いていたのは私じゃない」

優菜、髪をかきあげると、右耳にワイ

ヤレイヤホンが。

優菜「（通話）終わったよ、紗季」

紗季の声「OK、じゃあ帰るね」

優菜「ありがとう」

通話が切れる。

優菜「解いていたのは紗季。紗季に参考書名

と問題番号を伝え、紗季が電子書籍で買い、解答を私に言う。それで浪川の目の

前で難問を眼鏡なしで解く……これでア
イツも私の実力だと信じるしかない」

鏡に映る自分を見る。

優菜「せっかく色々準備してきたのに、結局
一番簡単なパターンか。つまんな」

優菜、伊達眼鏡をゴミ箱に捨てる。

○同・内

放心状態の浪川の下に、優菜が戻る。

優菜「ごめん！今ママから電話があつて、お
ばあちゃんが倒れたつて」

浪川「……」

優菜「ホントごめん！また今度ね」

優菜、お金を置いて出ていく。

○同・表

優菜、空気を吸う。

物陰に誰かがいる。

優菜「これで私を疑う余地はなくなった。完
全に私の勝ち」

物陰から出て来る紗季。

紗季「負けだよ……お前の」

紗季、笑う優菜を睨む。

○東慶大学・表（朝）

看板に『共通テスト試験会場』とある。

○同・大講義室・内（朝）

静かに着席している受験生たち。

その中に眼鏡をかける優菜がいる。

机には社会の問題と解答用紙。

試験監督、腕時計を見ている。

時計の針が9時30分を指す。

試験監督「始め！」

全員、一斉にペンを持つ。

○同・教務室・内（朝）

郵便配達員が来る。

職員の東野、対応する。

配達員「速達です」

東野、封筒を開け、中の書類を見る。

東野「これは……」

東野、何度も書類を読み返す。

○東慶大学・大講義室・内

全員が解答している中、ゆっくりと国語の見直しをしている優菜。

眼鏡越しに解答が浮かんでいる。

試験監督の腕時計が14時20分を指す。

試験監督「そこまで！」

全員、一斉にペンを置く。

× × ×

試験監督、回収した解答用紙を数え終わる。

試験監督「では、休憩時間に入ってください」

全員が席を立つ。

優菜「残りは英語か」

余裕の笑みを浮かべる優菜、退出しようとする扉に手をかける。

それと同時に先に扉がバンと開き、東野と職員2人が入ってくる。

東野「全員動かないでください！」

優菜「……？」

東野「この会場に不正行為を行っている者がいるという情報が入りましたので、今から全員の所持品検査をします！」

優菜「！？」

騒然とする受験生たち。

優菜、咄嗟に眼鏡を外し、ポケットへ。

東野「（優菜に）席へ戻って下さい」

優菜、胸に手を当てて、

優菜「お手洗いが我慢できないんですが……」

東野「では、まずあなたから調べますので、

その後行ってください」

優菜「……」

席へ戻る優菜。

○アパート・佐藤家・リビング・内

優子、豪華な食事を用意している。

優子「良い報告待ってるわよ」

満面の笑みを浮かべる優子。

○東慶大学・大講義室・内

女性職員、優菜の鞆を検査している。

その様子を見る優菜と東野。

他の受験生も野次馬の如く見る。

優菜M「落ち着け……眼鏡とは知らないはず」

女性職員「特に怪しいものはありませんね」

優菜、小さく安堵の溜息をつく。

東野「あなた、眼鏡は持っていますか？」

優菜「……え」

東野「持っているんですか？」

優菜「い、いえ……」

東野「そうですか……では、その跡は何です？」

東野、優菜の鼻の赤い眼鏡跡を指す。

優菜「こ、これは……」

女性職員が優菜の身体検査を始める。

優菜「……ッ！」

女性職員、優菜のポケットに触れる。

女性職員「これは……」

優菜「や、やめてッ……！」

優菜、職員の手を振り払い、逃走する。

東野「おい！待て！」

優菜を追いかける東野。

○同・廊下

走る東野、徐々に優菜に近づく。

優菜「クソ……！」

優菜、立ち止まって眼鏡を壁に叩きつけ始める。

左レンズがバリンと割れる。

東野「ヤメろ！」

優菜、右レンズも叩きつける。

ヒビが入った瞬間、東野が優菜を取り押さえる。

○同・教務室・個室・内

机には参考書がある。

東野、ヒビが入った右レンズだけの眼鏡をかけ、参考書を見る。

東野「なんだこれは……！」

優菜、歯を食いしばる。

○同・職員室・内（夕）

仕事中の飯島。

固定電話が鳴る。

飯島「（出て）はい、桜川高校です」

東野の声「お世話になっております。わたくし、東慶大学の東野と申しますが……」

飯島、暫く通話していると、驚きで目を見開く。

○桜川高校・外観（夜）

雷鳴とともに雨が降り始める。

○同・教室・内（夜）

ざわざわとする生徒たち。

紗季や浪川、数種類の眼鏡を比較して
いる大神もいる。

ズブ濡れの飯島と優菜が入ってくる。

静まる一同。

飯島、優菜を教壇の前へ突き飛ばす。

飯島「（全員に）試験お疲れ。私立や国公立
を控えている者は引き続き頑張れよ。約1
名を除いてな」

優菜「……」

飯島「（優菜に）さっさとやれ」

優菜、ゆっくりと膝を折り始め、土下
座する。

浪川・大神「！」

紗季「……」

優菜「私は……1ヶ月ほど前から……定期試
験や小テストがある度に……不正をしてい
ました」

騒然とする生徒たち。

優菜「そして今日の共通テストでも同じ不正

を行ってしまいました……本当に……申し
訳ございませんでした」

優菜、頭を床に擦り付ける。

○同・生徒指導室・内（夜）

紗季、浪川、飯島がいる。

優菜、入ってくる。

飯島「怒涛の質問攻めは終わったか？」

優菜「……」

浪川「事情は聞いたが、何故俺が呼ばれる」

優菜、浪川を睨む。

優菜「白々しい……」

浪川「……は？」

優菜「アンタがチクったくせにッ！」

浪川「はあ？なんで俺がそんなことしなきゃ

いけないんだよ」

優菜「散々妨害しておいて何を今更！」

浪川「妨害だと？」

紗季、笑う。

優菜「……？」

紗季「優菜、アンタって本当にバカなのね」

優菜「え……？」

紗季「私よ。大学に告発文を送ったのは」

優菜・浪川・飯島「！？」

紗季「浪川が優菜を妨害する理由ある？」

優菜「な……何言ってるの？」

紗季「『浪川が合格率上げるため』なんて嘘、
本当に信じてたんだ」

優菜「嘘……？」

紗季「浪川の行動の動機は全然別。分かる？」

浪川「……」

紗季「バカバカしいくらい単純」

浪川「お、おい……」

紗季「浪川はね、優菜のことが好きなのよ」

優菜・飯島「……？」

浪川、顔を伏せる。

紗季「浪川が優菜の眼鏡をやたら確認しよう

としていたのは、不正を暴くためじゃなくて、

優菜に彼氏がいるか確認するため」

優菜「……は？」

紗季「優菜が眼鏡をかけ始めたのはいつ？」

優菜「……1ヶ月前」

紗季「成績が上がり始めたのは？」

優菜「……もちろん、1ヶ月前」

紗季「つまり、傍から見ると『優菜は眼鏡をかけ始めた時期から頭も良くなった』と感じるわけ」

優菜「誰もそんなこと気付いてないでしょ」

紗季「そう、普通は気付かない……優菜をずっと見てる奴以外はね」

浪川「……」

紗季「浪川だけはずっと見ていた。だから眼鏡と成績の因果に気付いた。浪川はこう思ったはず。『優菜が賢くなったのは大神と仲良くなったからだ』と」

優菜「……大神君？」

浪川「眼鏡フェチで頭も良い……その大神と親密になった影響で眼鏡をかけ始めたと思っただけ。成績も、アイツに勉強を教えてもらったから上がったんだと」

紗季「当然浪川は優菜が大神と付き合ってる
か知りたくなった。でも直接聞くのは無理。
だから優菜の眼鏡が伊達か度付きかで判断
することにした。伊達なら大神とデキてい
て、度付きならセーフだと」

飯島「流石に度付き眼鏡を男の趣味でかける
女はいないってことか？」

優菜「それじゃあ、カフェで眼鏡確認したと
きに驚いていたのも、伊達だったからって
だけ……？」

浪川「俺にとっては……大問題だ」

優菜「普通に聞けばいいじゃない！」

浪川「そんなことできるか！」

優菜「じゃあ、私が大神君と付き合っている
とかっていうあの変な噂も……」

浪川「……俺が流した……」

優菜、フラつく。

優菜「……紗季は……紗季はなんで……」

紗季、鼻で笑う。

紗季「鬱陶しいんだよ……」

優菜「……え……」

紗季「鬱陶しいんだよ！こっちが必死に勉強してる横で楽々と満点取りやがって！胸糞悪い！だから一番大事な入試当日にバラしてやったのよ」

優菜「……じゃあ、テストの件を飯島先生に告げ口したのも……」

紗季「試験当日まで待てず、ついね」

○（回想）同・職員室・内

飯島、浪川に怒鳴る。

飯島「違ったじゃねえか！」

浪川「そんなハズは……」

飯島「今度恥かせたらブチのめすぞ！」

浪川、舌打ち。

浪川「知らないですよ！何で俺が競馬の予想なんざしなきゃならないんですか！」

飯島「賢いんだからもっと有効活用しろや」

飯島、浪川に競馬新聞を投げる。

溜息をついて出て行く浪川。

（回想終わり）

○同・生徒指導室・内（夜）

優菜、紗季、浪川、飯島がいる。

優菜「そんな……」

扉をノックする音。

優菜「……？」

飯島「どうぞ」

優子が入ってくる。

優菜「……ッ！」

飯島「佐藤さん、お忙しいところ来ていただ

きまして申し訳ございません」

優子、飯島を無視して優菜の前へ。

優菜「ママ……私、」

優子、優菜の言葉を遮るように、優菜の頬をバチンツと叩く。

紗季・浪川・飯島「！」

優菜、啞然とする。

優子「今までのが全部カンニング……？フザ

けんなよ！恥かせやがって！どうしてくれんだ！親戚やあの男にも東大行くって言
つちまっただじゃねえか！」

優菜「……マ……マ……」

飯島「さ、佐藤さん、少し落ち着いて」

優子「アンタは私だけじゃない、優馬の顔にも泥を塗ったんだよ！」

咄然とする紗季、浪川、飯島。

優子「優馬とは大違いね。中学受験は失敗するわ、高校はこんな２流校へ進学するわ、挙句の果てに大学受験でカンニング……アンタのために投資してやったのに！この恥
晒しが！」

優菜「……」

浪川「ちよっとアンタ」

優子「ああ？」

優子、浪川を睨み付ける。

紗季「……親子そっくりだな」

優子「……なに？」

紗季「自分さえ良ければいいんでしょ。自分

が注目されたいがために不正をする娘、自分の面子のために子供を利用する母親……」

優菜「違う！私はただママに喜んで欲しく

て……！」

紗季「知った事か！そんなこと！」

優菜「……！」

紗季「試験の度に不正を繰り返し、皆の努力を踏みにじった！定期試験の結果は私立の推薦枠や奨学金にも影響するのに！」

優菜・優子「……」

紗季「何がママのためだ……何が娘のためだ……くだらないエゴで他人の人生を狂わせやがって！」

一同、静まり返る。

浪川「（紗季に）人のこと言えるのか」

紗季「……は？」

浪川「本当に皆のことを思っていたなら気付いた時に言えよ。結局お前も佐藤に私刑を下したい一心で今日まで不正を黙っていた。同罪だ」

紗季「私は皆のために悪を暴いた！そのど
こが罪なのよ！」

室内に沈黙が流れる。

飯島「……これからどうする、佐藤」

優菜「……3年生全員に謝罪します」

紗季「なんだそれ」

優菜「本当に申し訳ございませんでした」

優菜、頭を下げて出て行こうとする。

優子「受験はどうする気？」

優菜「心配しないで。一人暮らしして自分で

生計立てながら浪人するから」

優子「浪人？浪人なんて世間体が……そう

よ！留学！留学することにしましょう！」

紗季、浪川、飯島、絶句する。

優菜「……さよなら、お母さん」

優菜、出て行く。

紗季「……こんなクソ親と……同罪……？」

浪川「正義だろうが善意だろうが、一個人が

他人を利用していいわけがない……」

紗季「……」

○同・正門

看板に『桜川高等学校卒業式』とある。
胸にリボン記章を付けた証書筒を持つ
卒業生が大勢いる。

○同・裏門

人気のない場所で眼鏡を見つめる優菜。
裏門から出ようとする。

優菜の背後から浪川が来る。

浪川「一人暮らし、どこですか決めたの
か？」

優菜、振り返る。

浪川「俺、春から東大行くんだ」

優菜「……」

浪川「東大生の家庭教師の平均時給って5千
円らしいぜ。生徒は旧帝大とか医学部志望
ばっかりなんだ」

優菜「……」

浪川「だからテキトーに出来なくてよ」

優菜「……」

浪川「良かったら練習相手になってくれよ。

どうせ金ないんだろ？東大生が無料で教えてやる」

出て行こうとする優菜。

浪川「……………いんだ」

優菜「……………」

浪川「会いたいんだ！佐藤と！東京来いよ」

優菜「……………」

紗季が裏門から入ってくる。

紗季「やっぱりむつつりスケベだね、浪川」

優菜「……………」

紗季「たまたま、偶然、私も上京するけど」

優菜「……………紗季……………」

優菜、意を決したように右腕を挙げる。

紗季・浪川「？」

優菜、眼鏡を裏門に叩きつける。

紗季・浪川「！」

バキバキに砕け散る眼鏡。

優菜「行こうかな、東京」

優菜の頬に涙が伝う。

(
了
)